

「ふつう」であることの安心感(2)：集団規範からの逸脱という観点から¹⁾

Are Normative Japanese Happy?: Reconsideration of “Futsu” Conception among Japanese

黒石 憲洋 KUROISHI, Norihiro

● 日本教育大学院大学
Japan Professional School of Education

佐野 予理子 SANO, Yoriko

● 国際基督教大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, International Christian University

Keywords 「ふつう」、社会的比較、命令的・記述的規範、逸脱
“Futsu”, social comparison, injunctive/descriptive norm, deviance

ABSTRACT

日本人における「ふつう」概念の重要性について検討するため、場面想定法を用いた3つの質問紙実験をおこなった。自己が周囲の他者と同じ行動をとる状況と異なる行動をとる状況を設定し、感情状態への影響を検討した。研究1では、拘束力の高い状況と低い状況を設定して検討したところ、拘束力の高い状況においては周囲の他者と同じ行動をとることが感情状態に影響を与えることが示唆された。研究2では、命令的規範と記述的規範を独立に操作して検討をおこない、周囲の他者と同じ行動をとることが否定的感情や安静状態に影響を与えていることが示唆された。研究3では、文化的規範からの逸脱の程度を3水準設定して検討をおこない、周囲の行動が極端に逸脱した状況以外では、否定的感情と安静状態への影響が認められた。3つの研究を通じて、他者と比較して「ふつう」であることが否定的感情の低さや安静状態の高さをもたらすことが明確となった。

Three experimental questionnaire surveys examined the importance of the conception of “futsu” among Japanese. In the 3 studies, an imaginary story about a normative or deviant person within a group was presented

to each respondent. The respondent was required to assume oneself as the leading character of the story, and to rate their affective estimations in the given situations. In study 1, the effects of being normative/deviant on the emotions were examined in high- and low-binding situations. The respondents with the normative story reported “futsu” cognition and calmness more than ones with the deviant story. The results indicated that comparison with the surrounding others might influence on the affective state. Study 2 manipulated injunctive and descriptive norm independently. The result suggested that descriptive norm rather than injunctive norm influenced the affective state. Thus people who behaved the same as the surrounding others even when did not follow the injunctive norm would feel calm and less negative. In study 3, three conditions with different degrees of deviance were presented. Being consistent with study 1 and 2, the participants with the normative situations estimated more calmness and less negative affect. The only exception was that the surroundings were too deviant from injunctive norm, and the situation was recognized as curious. These results revealed that (descriptive) normativeness would bring psychological calmness and less negative affect on Japanese people.

1. 問題

1. 1 日本人の「ふつう」志向性に関する実証的研究

比較文化的な文献の多くは、日本人は他者との関係性や調和を重視し、個性的で独自の存在であることよりも、他者と変わらず同じであることを志向することを指摘してきた（阿部, 2002；濱口, 1982；荒木, 1973；土居, 1971など）。いくつかの研究においても、日本人には「ふつう」であることを求める動機があると仮定されている（石井, 2005；Ohashi & Yamaguchi, 2004；元橋, 1993）。しかし、自分が「ふつう」だと認知することが自己にとって好ましい状態であるという事実を示すような実証研究はあまり多くない。

そのうち課題遂行を扱う実験研究では、「ふつう」以上であるというフィードバックが満足感や感情状態を高めるという結果が得られている。高田（2000）では、認知課題において「優れている」あるいは「同等である」という実験フィードバックを与えた場合、「劣っている」という実験フィードバックを与えた場合と比較して、成績への満足度や自己評価が高く、実験前後で「愉快」の感情が上昇し、「沈鬱」・「焦燥」の感情が低下した。同様に、佐野・黒石（印刷中）では、認知課題において「優れている」あるいは「ふつう」という実験フィードバックを与えた場合、「劣っている」

という実験フィードバックを与えた場合と比較して、状態自尊心や肯定的感情が高く、否定的感情が低かった。また、大橋（2006）も同様のフィードバックをおこない、「ふつう」以上であれば成績に納得し、満足感が高くなると指摘している。このように、課題遂行を扱う研究では、他者と比較して「ふつう」あるいはそれ以上であるということが肯定的な心理状態をもたらすことが示されている。ただし、これらの結果は、「ふつう」以上であることの有効性を示すものであり、周囲の他者から突出せず個人間に差がつかないという意味での「ふつう」（元橋, 1993参照）を表すものではないことには注意が必要である。

一方、課題遂行以外の領域では、他者と比較して「ふつう」であることが、ポジティブな心理状態と結びつくという研究結果は、ほとんど示されていない。例えば、独自性欲求についておこなわれた Okamoto（1983）の実験研究では、パーソナリティ特性や意見・価値観・興味などが他者と極端に類似しているというフィードバックを与えた条件では、緊張や不安に関連する気分が高かった。

その他、自己認知を扱った質問紙調査研究においても自己が「ふつう」であることの有効性は極めて限定的にしか示されていない。大橋・針原（2000）においては、自己が「ふつう」であると

認知していると自己好意が高いという結果が得られているが、これは「ふつう」に価値を置く回答者のみにあてはまる結果であり、その相関も弱いものであった。佐野・黒石（2005）においては、自己についての「ふつう」認知が高い回答者では孤独感が低いという結果が得られたが、これは独自性欲求が低い回答者に限られた結果であり、またこの研究では「ふつう」認知は全般としてウェル・ビーイングと負に相関していた。

このように、課題遂行以外の領域では、「ふつう」であることがネガティブな状態であることを示すような研究結果も存在している。ただし、これまでの研究では、広く一般的な他者との比較が想定されており、漠然とした「ふつう」が扱われてきたといえる。しかし、「ふつう」であるかないかが顕現化するのには、具体的な状況に置かれた場合であると考えられる。「ふつう」であるかないかの認知は、比較の対象となる準拠集団や規範の強さ、行動の自由度などによって変化するはずである。これまでの研究では状況要因を考慮しなかったために、「ふつう」認知が影響を持たなかった可能性がある。

1.2 本論文の目的

以上を踏まえ、本研究では課題遂行以外の領域に注目し、特定の状況を設定した上で、周囲の他者と比較して「ふつう」であることが日本人の心理状態に与える影響について検討をおこなうことを目的とした。本論文では、周囲の他者と比較して「ふつう」であるという状況を検討するにあたり、心理学的状況の拘束力（外山，2004）、命令的規範と記述的規範（Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991）、命令的規範からの逸脱の程度という観点についてそれぞれ検討するため、3つの研究をおこなった。

2. 研究1

2.1 目的

研究1では、まず現実的な蓋然性の高い状況において「ふつう」であることが感情状態に影響を及ぼすことを確認することを目的とした。その

際、心理学的状況の拘束力（外山，2004）という観点を考慮した上で、周囲の他者と同じ行動をとるか、異なる行動をとるかといったことが、「ふつう」認知および感情状態に及ぼす影響について検討した。

2.2 方法

研究方法 仮想場面を用いた場面想定法による質問紙実験をおこなった。

有効回答者 大学生および大学院生30名（男性6名；女性24名）。

質問紙 仮想場面を提示し、自分自身の経験として想定させた上で、そこでの感情状態および「ふつう」認知を求めた。感情状態の測定には一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木，2000）5件法24項目を使用した。「ふつう」認知の測定には独自に作成した「周囲になじんでいる」、「違和感を感じる」、「周囲から浮いている」、「ふつうだと感じる」の5件法4項目を使用した。

場面設定 心理学的状況の拘束力（外山，2004）という観点を考慮して、2つの仮想場面を設定した。拘束力が高い状況は就職面接の場面とし、紺色のリクルートスーツを着た他の受験者との比較により、行動の異同を操作した。すなわち、主人公が紺色のリクルートスーツを着ている条件（同行動）と、グレーのリクルートスーツを着ている条件（異行動）を設定した。拘束力が低い状況は喫茶店で友人と待ち合わせをする場面とし、友人と同じコーヒーを頼んだ条件（同行動）と友人とは異なる紅茶を頼んだ条件（異行動）を設定した。**要因計画** 本研究では、拘束力の高低は被験者内要因、行動の異同は被験者間要因として操作した。実際の実施に際して各回答者は、拘束力の高い場面と低い場面の両方について、他者と同じ行動かまたは異なる行動のいずれかのストーリーを提示された（ストーリーの配置については場面ごとにランダム）。ただし、分析に際しては拘束力の高低についても便宜的に被験者間要因とみなし、拘束力2（高・低）×行動2（同・異）の2要因分散分析をおこなった。

2.3 結果

チェック項目 状況を具体的に思い浮かべられたかどうか（現実性）については、理論上の中央値（3）との比較において、2つの場面とも現実性は有意に高く評定されていた ($t(29)=5.67, p<.001$; $t(29)=11.56, p<.001$)。また、拘束力については、場面間で比較をおこなったところ、その差は有意であった ($t(58)=3.25, p<.01$)。これらから、設定した場面は回答者にとって十分に現実的な場面として認識されており、状況の拘束力についても当初の想定通りに機能しているものとみなして、以下の分析をおこなった。

「ふつう」認知 分散分析の結果、拘束力×行動の交互作用が有意であった ($F(1,56)=4.40, p<.05$)。拘束力の高い場面においてのみ行動の単純主効果が認められ ($F(1,56)=7.25, p<.01$; $F(1,56)=0.16, ns$)、同行動の場合に異行動よりも「ふつう」認知が高かった。また、拘束力の主効果が有意であり ($F(1,56)=42.68, p<.001$)、拘束力の低い場面において「ふつう」認知が高かった。さらに、行動の主効果も有意であり ($F(1,56)=7.09, p<.05$)、同行動の場合に異行動よりも「ふつう」認知が高かった

(表1-1 および図1-1参照)。

肯定的感情 拘束力の主効果が有意であり ($F(1,56)=22.41, p<.001$)、拘束力の低い場面において肯定的感情が高かった。拘束力×行動の交互作用および行動の主効果は有意ではなかった ($F(1,56)=2.01, ns$; $F(1,56)=0.09, ns$) (表1-2 および図1-2参照)。

否定的感情 拘束力の主効果が有意であり ($F(1,56)=92.01, p<.001$)、拘束力の高い場面において否定的感情が高かった。拘束力×行動の交互作用および行動の主効果は有意ではなかった ($F(1,56)=1.02, ns$; $F(1,56)=1.30, ns$) (表1-3 および図1-3参照)。

安静状態 拘束力×行動の交互作用が有意であった ($F(1,56)=5.32, p<.05$)。拘束力の高い場面においてのみ行動の単純主効果が認められ ($F(1,56)=5.82, p<.05$; $F(1,56)=0.72, ns$)、同行動の場合に異行動よりも安静状態が高かった。また、拘束力の主効果が有意であり ($F(1,56)=48.52, p<.001$)、拘束力の低い場面において安静状態が高かった。なお、行動の主効果については認められなかった ($F(1,56)=1.22, ns$) (表1-4 および図1-4参照)。

表1-1. 各状況の「ふつう」認知の平均値 (標準偏差)

	自己の行動		全体
	同行動	異行動	
状況の拘束力：高	3.2 (0.81)	2.2 (0.74)	2.7 (0.91)
状況の拘束力：低	4.1 (0.80)	4.0 (0.85)	4.1 (0.81)
全体	3.7 (0.92)	3.1 (1.20)	3.4 (1.09)

表1-2. 各状況の肯定的感情の平均値 (標準偏差)

	自己の行動		全体
	同行動	異行動	
状況の拘束力：高	2.4 (0.63)	2.2 (1.02)	2.3 (0.84)
状況の拘束力：低	3.1 (1.14)	3.5 (0.52)	3.3 (0.89)
全体	2.8 (0.98)	2.8 (1.06)	2.8 (1.01)

表1-3. 各状況の否定的感情の平均値 (標準偏差)

	自己の行動		全体
	同行動	異行動	
状況の拘束力：高	3.1 (0.61)	3.5 (1.11)	3.3 (0.90)
状況の拘束力：低	1.5 (0.59)	1.5 (0.47)	1.5 (0.52)
全体	2.3 (1.02)	2.5 (1.32)	2.4 (1.18)

表1-4. 各状況の安静状態の平均値 (標準偏差)

	自己の行動		全体
	同行動	異行動	
状況の拘束力：高	2.4 (0.73)	1.8 (0.56)	2.1 (0.71)
状況の拘束力：低	3.2 (0.83)	3.4 (0.52)	3.3 (0.69)
全体	2.8 (0.87)	2.6 (0.98)	2.7 (0.92)

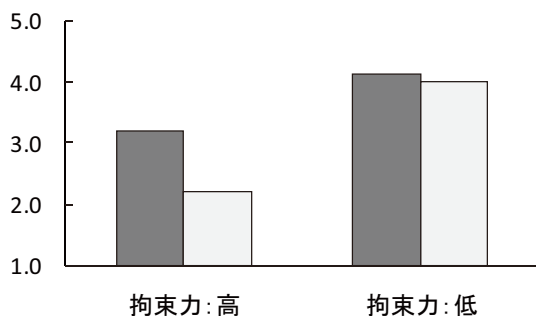


図1-1. 各状況における「ふつう」認知

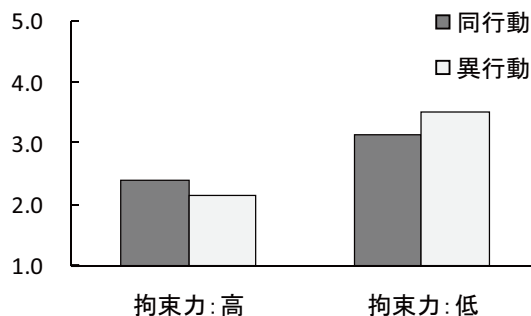


図1-2. 各状況における肯定的感情

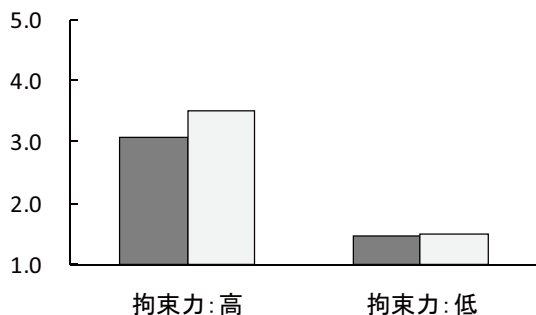


図1-3. 各状況における否定的感情

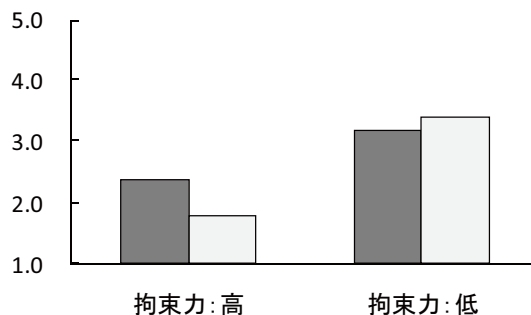


図1-4. 各状況における安静状態

2. 4 考 察

研究1では、心理学的状況の拘束力（外山, 2004）を考慮して拘束力の高い状況と低い状況を設定した。その結果、拘束力の高い状況においては、周囲の他者と同じ行動をとるか異なる行動をとるかということが「ふつう」認知および感情状態に影響を与えることが示唆された。

これまでの研究で確認されていなかった「ふつう」概念の有効性が、回答者の全般的な傾向として示唆されたことは重要である。すなわち、特定の状況が設定され、その状況の拘束力が高い場合には、周囲の他者と比較して「ふつう」であることが日本人のポジティブな心理状態に繋がることが示唆された。

しかし、研究1では拘束力の高い状況として、就職面接の場面において他の受験者が紺のリクルートスーツを着ているという社会・文化的規範に従う行動をとっている中で、そこから逸脱

するかどうかという、現実的に蓋然性の高い状況を対象とした。このため、社会・文化的価値観から逸脱することという意味で「ふつう」であることが影響したのか、周囲の他者の行動から逸脱するという意味で「ふつう」であることが影響したかについて、明確に弁別することができなかった。この点を明らかにするため、研究2をおこなった。

3. 研究2

3. 1 目的

研究2では、研究1のパラダイムに従って、心理学的状況の拘束力（外山, 2004）の高い状況において、「ふつう」であることが感情に与える影響について検討をおこなった。その際、命令的規範および記述的規範（Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991）を独立に操作して検討をおこなった。すなわち、社会・文化的に望ましいとされる行動（命

令的規範)と実際に周囲の他者がとっている行動(記述的規範)が一致する場面と一致しない場面を設定し、その中でいずれの規範に一致する行動をとることが感情に影響を与えるかについて検討をおこなった。

3.2 方法

研究方法 仮想場面を用いた場面想定法による質問紙実験をおこなった。

有効回答者 大学生および大学院生188名(男性68名;女性119名;不明1名)。

質問紙 仮想場面を提示し、自分自身の経験として想定させた上で、そこでの感情状態および「ふつう」認知を求めた。感情状態の測定には一般感情尺度(小川ら, 2000)5件法24項目を使用した。「ふつう」認知の測定には「ふつうだと感じる」、「なじんでいる」、「非常識だ」など、独自に作成した5件法9項目($\alpha = .90$)を使用した²⁾。

場面設定 仮想場面は、心理学的状況の拘束力が高い就職面接の場面とした。社会・文化的な価値観(命令的規範)に従う紺色のリクルートスーツを着ることを基準に、周囲の他者と主人公の行動を操作した。周囲の他者と主人公の行動について、それぞれ紺色のリクルートスーツを着ている条件(規範行動)と茶色のリクルートスーツを着ている条件(逸脱行動)の2条件を設定した。

要因計画 他者行動2(規範・逸脱)×自己行動2(規範・逸脱)で、すべて被験者間の2要因計画であった。各条件の有効回答者数は、他者:規範-自己:規範条件49名, 他者:規範-自己:逸脱条件46名, 他者:逸脱-自己:規範条件48名, 他者:逸脱-自己:逸脱条件45名であった。

3.3 結果

チェック項目 状況を具体的に思い浮かべられたかどうか(現実性)については有意に高く評定されており($t(186)=8.52, p<.001$)、就職面接において紺色のリクルートスーツを着ることが規範的行動であるかどうか(命令的規範)についても有意に高く評定されていた($t(187)=4.56, p<.001$)。これらから、設定した場面は回答者にとって充分

に現実的な場面として認識されており、命令的規範も高く認識されているものとみなして、以下の分析をおこなった。ただし、状況的に規範行動が求められているかどうか(拘束力)については、周囲の他者の行動により有意差があり、他者が命令的規範と異なる行動をとった場合に低かった($F(1,180)=7.24, p<.01$)。

「ふつう」認知 分散分析の結果、他者行動×自己行動の交互作用が有意であった($F(1,184)=98.22, p<.001$)。他者行動のいずれの条件においても自己行動の単純主効果が有意であり($F_s(1,184)>36.82, p_s<.001$)、他者行動と自己行動が一致している場合に「ふつう」認知が高かった。また、他者行動および自己行動の主効果はいずれも有意ではなかった($F(1,184)=1.03, ns; F(1,184)=1.65, ns$) (表2-1および図2-1参照)。

肯定的感情 他者行動の主効果および自己行動の主効果、他者行動×自己行動の交互作用のすべてが有意ではなかった($F(1,184)=0.01, ns; F(1,184)=2.51, ns; F(1,184)=1.28, ns$) (表2-2および図2-2参照)。

否定的感情 他者行動×自己行動の交互作用が有意であった($F(1,184)=51.85, p<.001$)。他者行動のいずれの条件においても自己行動の単純主効果が有意であり($F_s(1,184)>36.82, p_s<.001$)、他者行動と自己行動が一致している場合に「ふつう」認知が低かった。また、他者行動および自己行動の主効果はいずれも有意ではなかった($F(1,184)=0.50, ns; F(1,184)=0.20, ns$) (表2-3および図2-3参照)。

安静状態 他者行動×自己行動の交互作用が有意であった($F(1,184)=6.85, p<.05$)。他者が逸脱行動であった場合の単純主効果および自己が逸脱行動であった場合の単純主効果が有意であり($F(1,184)=9.17, p<.01; F(1,184)=6.60, p<.05$)、他者の行動も自己の行動も逸脱であった場合の安静状態が高かった。他者行動および自己行動の主効果はいずれも有意ではなかった($F(1,184)=3.00, ns; F(1,184)=1.05, ns$) (表2-4および図2-4参照)。

表2-1. 自他行動と「ふつう」認知の平均値（標準偏差）

	自己の行動		全体
	紺色	茶色	
他者の行動：紺色	3.8 (0.77)	2.5 (0.74)	3.2 (1.00)
他者の行動：茶色	2.6 (0.78)	3.6 (0.90)	3.1 (0.98)
全体	3.2 (1.01)	3.0 (0.97)	3.1 (0.99)

表2-2. 自他行動と肯定的感情の平均値（標準偏差）

	自己の行動		全体
	同行動	異行動	
他者の行動：紺色	2.1 (0.77)	2.2 (0.98)	2.1 (0.87)
他者の行動：茶色	1.9 (0.97)	2.3 (0.90)	2.1 (0.95)
全体	2.0 (0.88)	2.2 (0.94)	2.1 (0.91)

表2-3. 自他行動と否定的感情の平均値（標準偏差）

	自己の行動		全体
	同行動	異行動	
他者の行動：紺色	2.5 (0.88)	3.5 (1.01)	3.0 (1.06)
他者の行動：茶色	3.7 (1.00)	2.5 (1.15)	3.1 (1.21)
全体	3.1 (1.10)	3.0 (1.18)	3.0 (1.14)

表2-4. 自他行動と安静状態の平均値（標準偏差）

	自己の行動		全体
	同行動	異行動	
他者の行動：紺色	2.2 (0.80)	2.0 (0.83)	2.1 (0.82)
他者の行動：茶色	2.1 (1.00)	2.6 (0.86)	2.3 (0.96)
全体	2.2 (0.90)	2.3 (0.88)	2.2 (0.89)

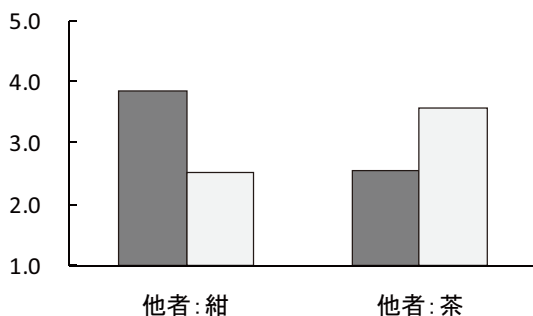


図2-1. 自己—他者の行動と「ふつう」認知

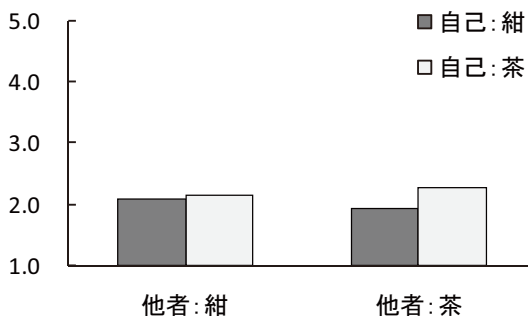


図2-2. 自己—他者の行動と肯定的感情

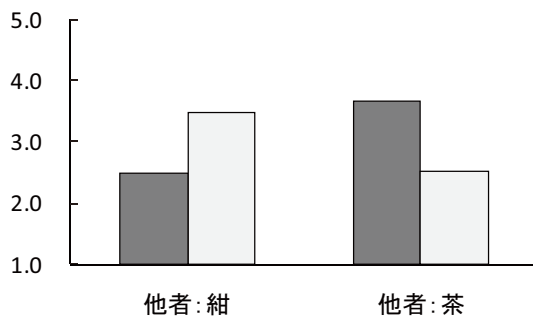


図2-3. 自己—他者の行動と否定的感情

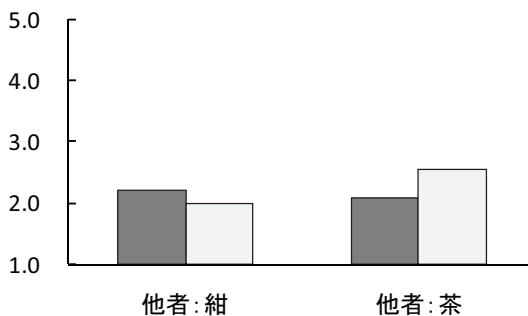


図2-4. 自己—他者の行動と安静状態

3. 4 考 察

研究2では、拘束力の高い状況において、周囲の他者と同じ行動をとることが感情状態に影響することが示された。特に、研究2では「ふつう」であることが否定的感情と安静状態に対して影響するという関連が認められた。研究1では、否定的感情の結果は有意ではなかったが、数値的には同様の傾向がみられており、周囲の他者と比較して「ふつう」であることは否定的感情と安静状態に対して影響があるものと思われる。

また、命令的規範と記述的規範 (Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991) という観点からは、社会・文化的規範との一致よりも、実際に周囲の他者がとっている行動への一致に対応して、感情状態への影響がみられた。このことは、周囲の他者と比較して「ふつう」であることの影響においては、命令的規範よりも記述的規範の方が重要であることを示唆するものかもしれない。

ただし、研究2では命令的規範から逸脱する行動として、就職面接の場面において茶色のリクルートスーツを着用しているという行動を設定した。逸脱の程度という観点を考慮した場合、命令的規範からの逸脱の程度が小さく、現実的な蓋然性が比較的高く認知されたことから記述的規範の影響が相対的に強く現れた可能性も考えられる。そこで、研究3では命令的規範からの逸脱の程度の水準数を増やして検討をおこなった。

4. 研究3

4. 1 目 的

研究1および2では、周囲の他者との比較は「ふつう」認知や否定的感情・安静状態に影響することが示された。特に、研究1では心理学的状況の拘束力が高い場合のみ「ふつう」認知と感情が影響を受けること、研究2では「ふつう」認知や感情は命令的規範への一致ではなく、記述的規範への一致により影響を受けることが示された。ただし、研究2では設定した命令的規範からの逸脱の程度が比較的小さかったために記述的規範のみが結果に影響した可能性がある。そこで研究3では、心理学的状況の拘束力が極めて高いと

考えられる場面を設定し、命令的規範と記述的規範を独立に操作した上で、規範からの逸脱の程度を拡大して検討をおこなった。また、「ふつう」認知および感情状態だけでなく、その後の行動についても検討した。

4. 2 方 法

研究方法 仮想場面を用いた場面想定法による質問紙実験をおこなった。

有効回答者 大学生96名(男性52名;女性44名)。
質問紙 仮想場面を提示し、自分自身の経験として想定させた上で、そこでの感情状態および「ふつう」認知を求めた。感情状態の測定には一般感情尺度(小川ら, 2000)5件法24項目を使用した。「ふつう」認知の測定には「ふつうだと感じる」、「なじんでいる」、「非常識だ」など、独自に作成した5件法9項目($\alpha = .90$)を使用した。また、提示された状況でそのまま葬儀に参列するかどうか(「参列する」「参列しない」「その他」)の行動評定を求めた。

場面設定 仮想場面は、心理学的状況の拘束力(外山, 2004)が極めて高い場面として、葬儀に参列する場面を設定した。葬儀において喪服を着用するという命令的規範に合致する程度を基準として、主人公および周囲の他者の服装に喪服・地味な平服・派手な平服の3水準を設定した。

要因計画 他者行動3(喪服・地味・派手)×自己行動3(喪服・地味・派手)で、すべて被験者間の2要因計画であった。各回答者は、無作為に9条件のうちの1条件に配置した。「ふつう」認知および感情状態に関しては、すべて被験者間の2要因分散分析をおこない、行動評定については、 χ^2 検定をおこなった。

4. 3 結 果

チェック項目 状況を具体的に思い浮かべられたかどうか(現実性)については有意に高く評定されており($t(94)=6.62, p<.001$)、葬儀に参列する際に喪服を着ることが規範的行動であるかどうか(命令的規範)についても有意に高く評定されていた($t(95)=31.12, p<.001$)。これらから、設

定した場面は回答者にとって十分に現実的な場面として認識されており、命令的規範も高く認識されているものとみなして、以下の分析をおこなった。ただし、状況の現実性には場面差がみられ ($F(2,93)=7.02, p<.01$)、他者行動が派手である場合に喪服よりも現実性が低く認知されていた。

「ふつう」認知 分散分析の結果、他者行動×自己行動の交互作用が有意であった ($F(4,87)=31.57, p<.001$)。他者行動が喪服である場合の単純主効果が有意であり ($F(2,87)=52.00, p<.001$)、自己行動の喪服条件で他の条件より「ふつう」認知が高かった。また、他者行動が地味である場合の単純主効果が有意であり ($F(2,87)=44.49, p<.001$)、自己行動の地味条件>喪服条件>派手条件の順に「ふつう」認知が高かった。他者行動が派手である場合の単純主効果は有意ではなかった ($F(4,87)=0.05, ns$)。また、他者行動の主効果および自己行動の主効果も有意であった ($F(2,87)=8.43, p<.001; F(2,87)=33.06, p<.001$) (表3-1および図3-1参照)。

肯定的感情 他者行動の主効果のみ有意であった ($F(2,87)=4.18, p<.05$)。他者行動が派手である場合に喪服よりも肯定的感情が高かった (表3-2および図3-2参照)。

否定的感情 他者行動×自己行動の交互作用が有意であった ($F(4,87)=13.22, p<.001$)。他者行動が喪服である場合の単純主効果が有意であり

($F(2,87)=18.26, p<.001$)、自己行動の喪服条件で他の条件より否定的感情が低かった。また、他者行動が地味である場合の単純主効果が有意であり ($F(2,87)=13.69, p<.001$)、自己行動の地味条件で他の条件より否定的感情が低かった。他者行動が派手である場合の単純主効果は有意ではなかった ($F(4,87)=0.51, ns$)。また、自己行動の主効果が有意であり ($F(2,87)=6.00, p<.01$)、他者行動の主効果は有意ではなかった ($F(2,87)=0.11, ns$) (表3-3および図3-3参照)。

安静状態 他者行動×自己行動の交互作用が有意であった ($F(4,87)=10.49, p<.001$)。他者行動が地味である場合の単純主効果が有意であり ($F(2,87)=20.34, p<.001$)、自己行動の地味条件で他の条件より安静状態が高かった。他者行動が喪服である場合の単純主効果および派手である場合の単純主効果は有意ではなかった ($F(2,87)=1.37, ns; F(2,87)=1.98, ns$)。また、他者行動の主効果が有意であり ($F(2,87)=5.21, p<.01$)、自己行動の主効果に傾向がみられた ($F(2,87)=2.93, p<.10$) (表3-4および図3-4参照)。

行動選択 χ^2 検定の結果、自己行動の主効果 ($\chi^2(2)=40.93, p<.001$) が有意であった。また、他者行動の主効果および自己行動×他者行動の交互作用は有意ではなかった ($\chi^2(2)=4.30, ns; \chi^2(4)=0.45, ns$)。なお、ほとんどの回答者 (89%) が仏式の葬儀を想定していた (表3-5参照)。

表3-1. 自他行動と「ふつう」認知の平均値 (標準偏差)

	自己の服装			全体
	喪服	地味	派手	
他者の服装：喪服	3.9 (0.70)	1.3 (0.28)	1.3 (0.55)	2.1 (1.35)
他者の服装：地味	2.7 (0.82)	4.1 (0.87)	1.3 (0.58)	2.6 (1.36)
他者の服装：派手	2.0 (0.85)	2.0 (0.68)	2.0 (0.63)	2.0 (0.70)
全体	2.8 (1.11)	2.4 (1.35)	1.5 (0.66)	2.2 (1.19)

表3-2. 自他行動と肯定的感情の平均値 (標準偏差)

	自己の服装			全体
	喪服	地味	派手	
他者の服装：喪服	1.2 (0.32)	1.1 (0.28)	1.2 (0.65)	1.2 (0.45)
他者の服装：地味	1.3 (0.42)	1.3 (0.32)	1.3 (0.68)	1.3 (0.50)
他者の服装：派手	1.7 (0.79)	1.3 (0.35)	1.7 (0.77)	1.6 (0.67)
全体	1.4 (0.59)	1.3 (0.33)	1.4 (0.70)	1.3 (0.56)

表3-3. 自己行動と否定的感情の平均値（標準偏差）

	自己の服装			全体
	喪服	地味	派手	
他者の服装：喪服	2.1 (0.95)	4.0 (0.81)	4.1 (0.66)	3.4 (1.22)
他者の服装：地味	3.7 (0.67)	2.2 (0.92)	4.1 (0.91)	3.4 (1.15)
他者の服装：派手	3.4 (0.97)	3.4 (0.85)	3.1 (1.06)	3.3 (0.94)
全体	3.1 (1.11)	3.2 (1.12)	3.8 (0.98)	3.4 (1.10)

表3-4. 自己行動と安静状態の平均値（標準偏差）

	自己の服装			全体
	喪服	地味	派手	
他者の服装：喪服	1.7 (0.50)	1.3 (0.33)	1.5 (0.69)	1.5 (0.55)
他者の服装：地味	1.7 (0.51)	2.9 (0.76)	1.2 (0.42)	1.8 (0.87)
他者の服装：派手	2.1 (0.80)	1.6 (0.60)	2.1 (0.60)	1.9 (0.69)
全体	1.8 (0.63)	1.9 (0.87)	1.6 (0.66)	1.8 (0.73)

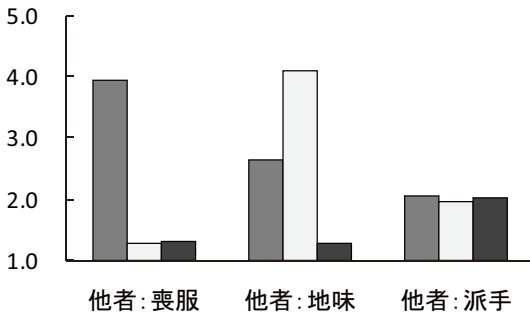


図3-1. 自己-他者の行動と「ふつう」認知

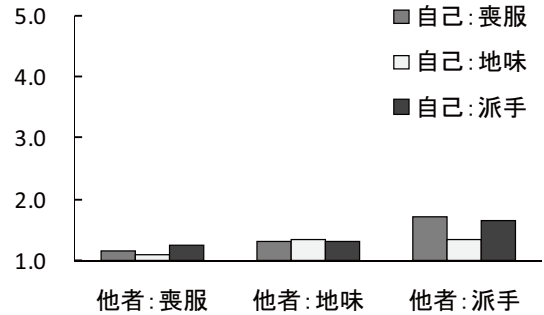


図3-2. 自己-他者の行動と肯定的感情

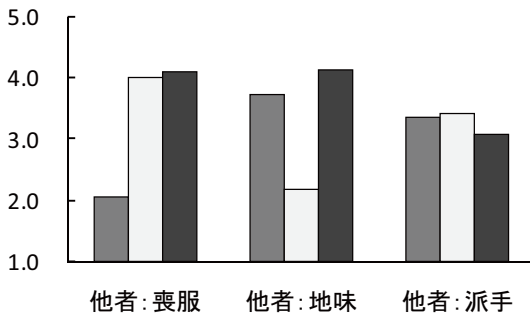


図3-3. 自己-他者の行動と否定的感情

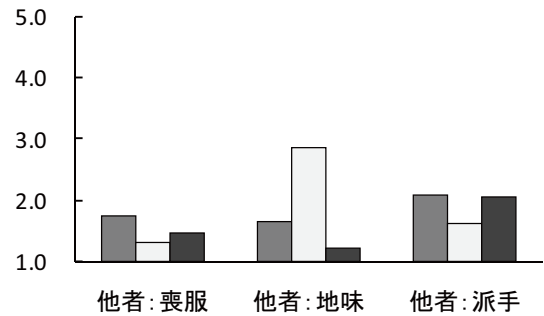


図3-4. 自己-他者の行動と安静状態

表3-5. 各条件の「参列する」選択率

	自己の服装			合計
	喪服	地味	派手	
周囲の服装：喪服	10/10 (100%)	6/10 (60%)	5/12 (42%)	21/32 (66%)
周囲の服装：地味	11/11 (100%)	8/9 (89%)	5/12 (42%)	24/32 (75%)
周囲の服装：派手	9/11 (82%)	9/11 (82%)	2/12 (20%)	20/32 (63%)
合計	30/32 (94%)	23/30 (77%)	12/34 (35%)	65/96 (68%)

4. 4 考 察

研究3では、仮想場面として葬儀場面を設定した。このため肯定的感情は全体として低得点を示したものの、研究1および2において「ふつう」であることは肯定的感情には影響しないことが示されており、結果の解釈には影響しないものと考えられる。

一方、他者と比較して「ふつう」であることの否定的感情や安静状態に対する影響は、明確に認められた。研究1および2と一致して、特に拘束力の高い状況では「ふつう」認知と否定的感情の関連は頑健であるように思われる。ただし、周囲の他者が命令的規範から大きく逸脱している状況では記述的規範は効果を持たなかった。記述的規範に基づく「ふつう」の影響は、周囲の他者が命令的規範から逸脱し過ぎて状況の現実性が低く認知されるような場合にはみられなくなるのかもしれない。

また、行動選択に関しては、記述的規範に関わらず、自己の行動が命令的規範から逸脱している場合に行動選択率が低かった。感情と行動では状況が影響するプロセスが異なる可能性もあり、さらなる検討が必要である。

5. 全体的考察

5. 1 「ふつう」であることの心理的影響

研究1～3を通じて、周囲の他者と比較して「ふつう」であることは、否定的感情および安静状態に影響を与えていた。このような傾向が頑健にみられたことは、極めて重要である。これまで日本人にとって「ふつう」であることが好ましい状態であるという指摘については、実証研究が少なく、またその結果も極めて限定的であった。特に遂行課題以外の領域では、「ふつう」であることがネガティブな心理状態をもたらすといった先行研究も示されてきた（佐野・黒石, 2005, Okamoto, 1983など）。これに対して、具体的な状況を設定した上で周囲の他者との比較における「ふつう」について検討した本研究では、「ふつう」であることが否定的感情の低さや安静状態の高さと関連していた。すなわち、特定の状況において

周囲の他者と比較する場合に「ふつう」という基準が顕現化し、「ふつう」であることがポジティブな心理状態に繋がると考えられる。日本人における「ふつう」志向について、これまでほとんど示されていなかった実証データが示されたといえよう。しかも、研究1～3を通じて頑健な傾向であったことから、少なくとも本研究と同様のパラダイムを用いた研究では、一貫した結果が示されることが予想され得る。

ただし、「ふつう」であることが影響をもつには、一定の条件があることも示された。心理的状況の拘束力（外山, 2004）が低い場合や、周囲の他者が命令的規範（Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991）から逸脱しすぎない場合、記述的規範に一致することは感情への影響をもたなかった。このことは、まさに「ふつう」の状況において自己が「ふつう」であることが心理的意味をもつことを示している。他者と自己の「ふつう」の在り方についての示唆を与えるものであり、興味深い。

今後も固有文化的な概念（大橋・山口, 2005参照）の検討をおこなうことで、日本人に特有のウェル・ビーイングの在り方を明らかにすることができるかもしれない。また、「ふつう」認知は安静状態や否定的感情と結びついていたことから、不安や抑うつといった精神的健康に関する知見をもたらすことも期待される。

5. 2 今後の展望

研究3にみられたように、周囲の他者と比較して「ふつう」であることの影響は、認知と行動では異なっている可能性が示唆された。「ふつう」であることと行動の関連については、今後さらなる検討が必要であると思われる。

自己が「ふつう」でない状態からいかにして逃れるかといった適応方略について、今後検討することが望まれる。

6. 参考文献

- 阿部謹也 (2002). 世間学への招待 青弓社
- 荒木博之 (1973). 日本人の行動様式—他律と集団の論理— 講談社

- Cialdini, R. B., Kallgren, C. A., & Reno, R. R. (1991). A focus theory of normative conduct: A theoretical refinement and reevaluation of the role of norms in human behavior. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 24, New York: Academic Press. Pp.201-234.
- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- 濱口恵俊 (1982). 間人主義の社会日本 東洋経済新報社
- 石井徹 (2005). 常識の規範的影響について 社会心理学研究, 20, 224-252.
- 黒石憲洋・佐野予理子 (2006). 「ふつう」であることの安心感 (2) 日本心理学会第70回大会発表論文集, 216.
- 黒石憲洋・佐野予理子 (2007). 「ふつう」であることの安心感 (4) 日本心理学会第71回大会発表論文集, 208.
- 黒石憲洋・佐野予理子 (2008). 「ふつう」であることの安心感 (6) 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, 274.
- 元橋豊秀 (1993). 人並み志向と平準化志向 社会心理学研究, 9, 1-12.
- 小川時洋・門地理絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, 71, 241-246.
- 大橋恵 (2006). ふつうなら、満足? : フィードバックされた成績が心理テストの妥当性評価に与える影響 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 14-15.
- 大橋恵・針原素子 (2000). 自分を「ふつう」だと認知することは自己評価を高めるか? 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 20-21.
- Ohashi, M., & Yamaguchi, S. (2004). Super-ordinary bias in Japanese self-predictions of future life events. *Asian Journal of Social Psychology*, 7, 169-185.
- 大橋恵・山口勲 (2005). 「ふつうさ」の固有文化心理学: 人を形容する語としての「ふつう」の望ましさについて 実験社会心理学研究, 44, 71-81.
- Okamoto, K. (1983). Effects of excessive similarity feedback on subsequent mood, pursuit of difference, and preference for novelty or scarcity. *Japanese Psychological Research*, 25, 69-77.
- 佐野予理子・黒石憲洋 (印刷中). 日本における「ふつう」の意味: 自己改善動機の観点から 対人社会心理学研究.
- 佐野予理子・黒石憲洋 (2005). 独自性欲求及び「ふつう」認知が精神的健康に及ぼす影響 国際基督教大学学報I-A教育研究, 47, 61-66.
- 高田利武 (2000). 日本人の「非自己高揚・自己批判傾向」再考—その規定条件と感情体験の実験的検討— 日本心理学会第64回大会発表論文集, 162.
- 外山みどり (2004). 心理学的状況の分類に関する探索的研究 学習院大学文学部研究年報, 51, 175-191.

註

- 1) 本論文で用いられているデータの一部は、それぞれ日本心理学会第70、71回大会および日本発達心理学会第19回大会において発表されたものである。
- 2) 研究2および3では、研究1で用いた4項目に「非常識だ」、「社会的におかしい」、「まともだ」、「周囲と調和している」、「社会的に適切だ」を加えた9項目により「ふつう」認知の測定をおこなった。4項目版と9項目版の相関は高く ($r=.95, p<.001$)、いずれを用いた分析結果も酷似していることから、信頼性を考慮して9項目版を分析に使用した。